



よっぼどの縁

大谷徹^{てつじょう}瑛 (奈良薬師寺執事)

昨年(しんねん)の1月、法話行脚の途中、翌日(あした)の天気を確認しようとテレビのスイッチを入れたときに放映されていたのが、NHKスペシャル『無縁社会』でした。「〈無縁死〉3万2千人の衝撃」という副題の通り、それによると国の統計には現れてこない、誰にも看取られずに亡くなっていく人、引き取り手のないご遺骨(ごいぼん)が、年間3万2千人もあるということです。普段はあまりテレビを観ない私ですが、現代社会が抱える問題に深く切り込んでいたこの番組は、見入ると同時に、それこそ大きな衝撃を受けました。

私は実家を離れ、寺での修行中に祖父母を亡くしたため、慈愛をもって大切に接してくれたその祖父母に何の孝行もできませんでした。その代わりとっては何ですが、全国のいわゆる「老人ホーム」を巡り、法話を続けてきました。そこで私が目にするのは「無縁」とまではいかないものの、家族との絆にうすい人々の生活でした。

ある「老人ホーム」で、「ここで生活している人には3つのパターンがある」ということを教えていただきました。

- ① 家族の世話にはなりたくない、迷惑をかけたくないと、自分から入る人
- ② 病気が進み、家族だけでは介護しきれないので入る人
- ③ 「捨てられる」人

「捨てられる」という言葉を、職員の方が平然と口にされるのを耳にしたとき、大きなショックを受けました。続けて話を伺うと、①、②の人は、年に数回なりとも、ご家族が見舞いに訪れるそうですが、③のタイプの方は、お正月はおろか、その「ホームを出る日」＝「死」まで誰も来ない。亡くなられたことを通知すると、それこそ「そちらで〈処理〉して下さい」といわれ、「預金通帳」があると伝えれば、後日通帳だけを持ち帰り、ご遺骨は置いていく人まであるということです。

そんな「老人ホーム」を「姥捨山^{うば}」にする家族に、私も初めは強い怒りを覚えました。しかし多くの「老人ホーム」を巡るうちに、問題の根は家族ばかりにあるのではないことが解^{わか}ってきました。現役時代にどんな職業や地位に就いてお

られたのか分かりませんが、若い看護師やヘルパーさんを、まるで時代劇のように強い命令口調で怒鳴っている人、自分の過去の栄光を振りかざし、老人であることを自覚できない人、そうした姿を各地で目にするにつれ、私の心は微妙に変化しました。そして私の心がふとつぶやいたのは、「捨てられる自分を育ててしまったのは誰？」という言葉でした。



「和を以て貴しと為す」

今から1400年ほど前に、この国の国造りに生涯を掛けられた聖徳太子は『十七条の憲法』を策定されました。その第1条の書き出しが、有名な「和を以て貴しと為す」です。その「和」の精神が満ちあふれる国、「大いなる和の国」を願われ「大和」という言葉が生まれたといます。逆に言えば、当時それを願わずにはいられない状況であったということです。

昨年、私のいる寺で行われた「寺子屋合宿」に、全国から集まった子どもたちの中の、10人の小学校1年生にこんな質問をしてみました。「学校に嫌な人がいますか？いるとしたらそれはどんな人ですか？」と。同じ学校から来ている子どもはいませんから、もちろん名指しの個人攻撃が目的ではありません。それでも「悪口を言う人」(8名)、「すぐ叩く人」(7名)、「授業中に邪魔する人」(5名)など、わずか6歳から7歳の1年生にして、そこには私たち大人が抱えるのと同じ、「和」とはほど遠い人間関係が存在していることが分かりました。どうやら聖徳太子の時代も現在も、人間の本质はあまり変わっていないようです。



では、どうしたら「和」を保つことができるのでしょうか。実は、この「和」という言葉そのものにヒントがあると私は考えています。

先日、聖徳太子ゆかりの寺、法隆寺に参拝しました。修復中の講堂の屋根瓦1枚を寄進したところ、『十七条の憲法』の第1条と第22条の書き下し分が記されたお礼状を頂戴しました。そこには「和」という字が「やわらぎ」と読まれていました。その読み方を知ったとき、「和」という言葉には、人々にとっての幸せとは何かという「目的」と、その幸せになるための「手段」との両方の意味が含まれていると感じました。つまり、「和」という言葉は、「和」という「理想」で

あると同時に、その理想に近づくために、誰もが「和」の心を以って生きなければならないという、両方を示しているということです。

戦後、一人一人の個性を大事にと叫ばれ、そうした教育が続けられてきました。それは良いことに違いないのですが、大事にし過ぎていつのまにか「我」の世界の花盛りです。「他よりも我」を貫き、皆が「我利我利」の「我」を主張すれば、ギスギスした世の中になるのは当然です。そこから「孤立」や「無縁」が生じてくるのです。

では、「やわらぎの心」を持つにはどうしたらよいのでしょうか。その鍵は「無縁」の対極に「有縁」があると知ることから始まる、と私は考えています。「有縁」すなわち、すべてのものごとは「縁が有って」成り立っているのだということ心静かに見つめ直すことが大切です。「縁が無ければ、親子にも、兄弟にも、夫婦にも、家族にも、友人にもならなかったのだ」と気づき、さらにもう一歩進めて、その「縁」は「たまたま」でもなく「偶然」でもなく「よっぽどの縁」なんだと思い直せたとき、相手を受け入れる「やわらぎの心」が生まれます。そこには「無縁」という悪魔のささやきのような冷たい言葉は消え去り、ぬくもりのある人生が、広がっていくことでしょう。

「抜萃のつづり その七十一」より



『うまれてきてくれてありがとう』

Mon さんコンサート

in 高松市・仏生山交流センター

日時：2024.11.17（日）13：00～14：30

開場：仏生山交流センター TEL 087(889)6555

入場料：当日現金支払 おとな 2000 円、こども（小学生～高校生）1000 円

Mon さん プロフィール：福岡県糸島在住。二児の母。叔父は、歌手のにしきのあきら。

在日韓国人やADHDという特性であるが故にイジメられた経験や、“いのち”や“愛”の大切さを歌と語りで伝えます。